

INTERVIEW

宮城県女川町長
須田善明氏



【プロフィール】 須田善明氏 1972年、女川町に生まれる。父は元女川町長の故 善二郎氏。明治大学卒業後、広告代理店勤務を経て、1999年宮城県議会議員に初当選。3期を務めた後、2011年11月より女川町長として現在に至る。東日本大震災による津波で家を失い、母、妻、長男、長女と仮設住宅に居住。

病院を核とした、 千年に一度の町づくりを

聞き手：山田隆司 地域医療研究所所長

2011年3月11日

山田隆司(聞き手) 今日は女川町役場に須田善明町長を訪ねました。東日本大震災から3年が経過し、今後の町づくりや町の医療のお話などを伺いたいと思います。まずは簡単に自己紹介いただき、それから震災の時のお話などお願いします。

須田善明 私は2011年11月に町長に就任し、町政と震災後の復興の舵取りを安住宣孝前町長から引き継いでやってきました。それ以前は県議会議員

を3期12年、27歳の時から務め、まもなく任期終了という時にあの震災が起きました。県議会では保健委員長を務め、県という広域的な立場の医療体制などについては議論や提案をしてきました。しかし、あの3月11日を境に私たちに突き付けられたものは非常に重く、ここまで長期にわたって生活のインフラや身のまわりのものが失われた状況というのは経験したことのないこと

です。

山田 お父様が長く女川町長を務められたのでしたね？

須田 はい、父は15年ほど前に他界しましたが、4期務め、5期目になってすぐに他界しました。

山田 そうですか。町長のご自宅は町内だったんですよね。

須田 ちょうど町役場と旧町立病院の間ぐらいいあったのですが、家は津波で100メートルくらい奥にころがっていました。

山田 震災当日はどこにおられたのですか。

須田 県の委員会が終わり女川町に戻ってくる途中でした。われわれ浜の人間にとって「揺れたらとにかく津波と思え」というのは小さいころから染みついていたことですが、あそこまでのものは想像もできませんでした。津波が沿岸部に入ってくるところは目の当たりにはしていませんが、北上川が津波の遡上であふれている横をぎりぎり通りながら町に向かいました。

山田 町にはすぐ入れましたか。

須田 日没後くらいに町に入れました。その晩電話はつながりませんでしたので、ショートメールで情報収集したり、県とのやり取りをしました。翌朝ようやく水が引きはじめたので町に入り、熊野神社のあたりを上がって病院の横を下りて行きました。病院は1階の天井まで浸水し、駐車場の車が裏返しになって水に浸かっていたり、ガスボンベがぶら下がっていたり……。

山田 その光景は私もよく覚えています。

須田 病院ではあんな状況の中でスタッフの方が動いている様子が見えたので、何とか頑張っていたに感じました。あとになって山田先生がヘリで駆けつけてくださったことや当時の壮絶な状況を聞いたので、そのお陰で多くの方の命をつなぐことができたのだと実感しました。

山田 われわれは震災翌日の土曜日には東京を出ることができず日曜日にやっとヘリの手配がついて女川まで飛んで来ましたが、当日は現地に着陸できず、いったん引き返したのです。私自身は再度ヘリで黒川病院を経由して火曜日に入ることができました。その日も職員が我が身を省みず押し寄せてくる負傷者や住民の対応に専念している姿を見て本当に胸が塞がる思いでした。

小学校の教室に設けられた対策本部へ行くと黒板にチョークで死者何名、行方不明何名と書いてあってそれが毎日変わっていくんですね。その黒板の前に安住前町長がいつも座ってらっしゃって、本当に満身創痍といったお姿でした。常にあれこれ不安定な状況の中で、いろいろな要望や意見を聞きながら厳しい選択を迫られる毎日だったと思うのですが、安住町長は当時そういうことを一身に背負っている感じでした。このままでは倒れてしまうのではと本当に心配しました。そういう被災地の対策本部長という立場の町長の職をあえて須田さんが引き継ごうとされたご決意は並々ならないものだったのではと推察します。

復興の第1歩を担うために

山田 町長になろうと決心された時はどういうお気持ちでしたか。

須田 やはり生まれ育った町ですし、骨を埋めていく町でもあるわけです。これから本当の意味での復興が始まるのだらうと思っていますが、復興を20

年くらいのスパンで捉えた時に、その中核となる世代はやはりわれわれの世代ではないかというのが一つありました。この1歩目からわれわれが担っていくべきだと考えました。それから、子どもたちのことがありました。本当に無残な姿に